

／特／集／  
まえがき

## 日本の海洋教育

大松重雄

春の海 ひねもすのたり のたりかな

(与謝蕪村)

海恋し 潮の遠鳴り数えつつ

少女となりし 父母の家(与謝野晶子)

四方を海に囲まれたわが国の多くの人びとにとって、海の存在は身近なものであろう。

海は、いにしえより、日本人の食文化のみならずこころのなりたち、精神文化にも少なからず影響を与え続けてきたのではなかろうか。

地球は水の惑星といわれる。地球の表面積の7割は海表面である。そしてこの海こそ地球の生命が芽生えたところである。海の持つ大きな熱容量は、全地球的気候変動、環境変化に決定的に重要な影響を与える。また海は、人類に、膨大な水産資源、有用な鉱物資源などを産出させると同時に、海上交通、リクリエーションの場も提供してくれる。しかし時には、まさに昨年(2011年)の東日本大震災のように大津波が甚大な被害を与えることもある。また、荒れ狂う海の波は航行する船舶や漁船にとって脅威である。

このように海洋は、直接・間接に私たちの生活に大きな関わりがあるが、国民の海に関する知識や関心は高いとはいえない。その原因はわが国の海洋教育の貧困さにあるのではなかろうか。わが身を振り返ってみても、学生時代に「海」についてまとまった授業を受けた記憶がない。太陽・月の引力による潮の満ち引き、海流の名前を教わっただけのような気がする。

そこで本特集では、海洋教育の現状を分析し、あるべき海洋教育の姿を探り、提案することを試みた。

はじめに、市川論文は本特集のきっかけとなった論文で、海洋科学の総合科学としての特徴、分野分類、探究型科学教育の教材としての海洋の有用性などについて述べている。

ところで、海に関連する代表的な学会「日本海洋学会」「日本船舶海洋工学会」では、海洋教育についてどのように分析し、どのような取り組みをしているであろうか。各学会で海洋教育に関係しておられる方に、学会レベルでの活動を紹介していただいた。水産教育関係については佐々木論文で、過去および今後の方向性を示していただいた。

ついで、福島論文では、初等・中等教育と高等教育、それぞれの場における海洋教育の在り方について考察を加え、普及策を示した。

最後に、在田論文は、海洋教育には全生徒に乗船体験をさせることが有効だとして、そのために必要な教育船の建造を提唱している。

2007年、海の日に施行された海洋基本法でも「海洋に関する国民の理解の増進と人材育成」が謳われている。本特集が少しでもその一助になれば幸いである。最後に、読者の便宜のため、海の基本データを示しておく。

<p>海の面積：3億6000万 km<sup>2</sup> (地球表面積の71%)          平均深さ：3700m (最深部はマリアナ海溝 10920m)          海水の比重：1.025          塩分濃度：3.5%          全海水の熱容量：5.8×10<sup>24</sup> J/K          (全大気の熱容量は：5.3×10<sup>21</sup> J/K)          日本のEEZ面積：448万 km<sup>2</sup> (国土面積38万 km<sup>2</sup>)          (数字はすべて概数)</p>
--

(おおまつ・しげお：東京支部，海洋工学)